

[論 文]

大学生の「蛙化現象」概念の理解の質的な変化 －虚像崩壊説および性交嫌悪説の検討－

Qualitative Changes in Undergraduate Students' Understanding of the Concept of the "Frogification" Phenomenon An Examination of False Image Collapse and Sex Aversion Accounts

井上 櫻子^{*1}、加藤 仁^{*2}

要旨

蛙化現象について、2023年時点の本邦で蛙化現象を扱った学術研究は少数である反面、2019年以降の蛙化現象の検索数は大幅に増加しており（吉田他、2021）、ウェブサイト・ブログ・SNSなどのメディアでの拡散を通じて蛙化現象の言説が変化してきている可能性が想定できる。すなわち、蛙化現象概念は「しろうと理論」（Furnham, 1988）のように経験的な理解によって再解釈されている可能性がある。この再解釈可能性について探索的に検討した予備調査では、大学生を対象とした質問紙調査によって、蛙化現象概念が部分的に学術的な定義とは異なって理解されていることを明らかにした。本調査では、大学生を対象に蛙化現象がどのように理解されているかの質的な変化について明らかにするために、先行研究にみられる蛙化現象の主要な生起要因（虚像崩壊説および性交嫌悪説）と個人要因との関連を検討し、蛙化現象概念の理解における質的な変化を考察した。その結果、予備調査と同様に全体としては学術的な定義と類似した理解がなされていたものの、「冷める」という記述が頻出し、部分的に学術的な定義とは異なる理解がされているという結果が再現された。また、蛙化現象の経験と恋愛に対する態度との間に負の相関関係がみられたことから、蛙化現象の虚像崩壊説については、恋愛対象に理想を抱いているために生じるわけではない可能性が示唆された。一方、蛙化現象の経験と異性不安および成人の愛着スタイルとの間には有意な相関関係はみられず、性交嫌悪説については検討の余地が残された。

キーワード：蛙化現象（frogification）／ 親密な関係（romantic relationship）／
しろうと理論（lay theory）

I 問題と目的

蛙化現象とは、グリム童話の「蛙の王様」を意識して命名されたものであり、「ある男性に対し自分が一方的に好意を持っていると女性が理解している状況で、実はその男性も自分に対し好意を持っていることが女性にとって明らかになると、それがきっかけとなって、その女性がその男性に

対して生理的な嫌悪感を持つようになる現象」（藤澤、2004）と定義され、概念が提唱された当初は女性特有の現象として仮定されていた（藤澤、2004）。

その後の研究で、蛙化現象は女性特有の現象ではなく男女共通して起こりうる現象であることが明らかになり、「自分自身が好意的に感じていた相手が、自分に対し好意を持っていることが明らかとなると、それがきっかけとなって、その相手に対して生理的な嫌悪感を持つようになる現象」（吉田他、2020）と再定義されている。

^{*1} INOUE, Sakurako
アルスホーム株式会社

^{*2} KATO, Jin
北陸学院大学 社会学部 社会学科

近年、特に若者の間で話題にあげられる蛙化現象を取り扱った研究は少なく、蛙化現象が生じるメカニズムも明確にされていない現状がある。吉田他(2020, 2021)や藤澤(2004)は蛙化現象について学術的に定義をしているものの、一般的には本来の蛙化現象とはやや異なる心的状態を蛙化現象と認識しているウェブサイト・ブログ・SNS等の投稿が散見される。本稿では、近年若者の間で話題にあがる蛙化現象の概念は、従来の蛙化現象とは異なる特徴をもっていると仮定し、探索的な検討を行う。その際、心理的には異性との交際経験の有無などの異性との関係の取り方や、愛着・異性不安といった対人関係パターンが関連すると考えられる。これらを踏まえて、蛙化現象の概念がどのように変化してきているかについて検討することを目的とする。

蛙化現象の生起要因・心理メカニズムについて、蛙化現象の経験者と交際経験のない人とで判断の傾向が異なり、前者は虚像崩壊説(理想的に見えていた偶像としての相手が、告白してくることでただの男性に成り下がり、魅力が失われ失望する)が、後者は性交嫌悪説(両思いになることで性行為が現実味を帯びるため、防衛機制として嫌悪感が発動する)が先行研究では最も支持されていた(藤澤, 2004)。しかし、性交嫌悪説が蛙化現象の未経験者において生じやすいとされるが、先行研究の研究対象のように性交渉が受容可能な心的段階であっても蛙化現象は生じることから、元来の精神分析的解釈である性交嫌悪説は成立しない可能性がある。吉田他(2020)によると、蛙化現象の経験者は、内的体験として揺さぶられ感覚などを、意識的体験では自責や他責の無理解などを体験し、半数以上が平均3回程度繰り返し体験する。また、蛙化現象の経験および体験内容を定量的に検討した研究(吉田他, 2021)では、蛙化現象は「単純な拒絶体験ではなく複合的体験」であり、自責や他責という現事態への対処と将来に対するアラートとしての不安の2次元からなると推測されている(吉田他, 2021)。

蛙化現象の「しろうと理論」化

2023年現在、本邦で蛙化現象を扱った研究は藤澤(2004)、吉田他(2020, 2021, 2022)、川久保

・小口(2022)の5件であり、これらの研究はいずれも上記の学術的な定義に基づいて蛙化現象概念を扱っている。このように学術研究は少数である反面、2019年以降の蛙化現象の検索数は大幅に増加しており(吉田他, 2021)、ウェブサイト・ブログ・SNSなどのメディアでの拡散を通じて蛙化現象の言説が変化してきている可能性が想定できる。すなわち、蛙化現象概念は「しろうと理論」(Furnham, 1988)のように経験的な理解によって再解釈されている可能性がある。

実際、本来の定義とは異なり、定義の一部のみをさして蛙化現象という事例がウェブサイト・ブログ・SNSなどのメディア上において見受けられる。具体的には、「蛙化現象同性の友達にも起こらない? 仲良くなって好きって懐かれると萎える」(原文ママ)、「自己肯定感低すぎて私と仲良くなりたいって近づいて来てくれる人、話しかけてる人、同性でも異性でも誰でも蛙化現象起こしちゃうのいい加減どうにかしたい。なんで自分なんかと仲良くしようとしてくれるの? 自分の何が魅力的なの? 話してもなんにも楽しくないよ? …もう少し自分を好きになりたいな」(原文ママ)、「なんか蛙化現象というのが話題になってるけど、それって男女の間だけではなく同性の間でも成り立つのでは? つまり私がいいたいのは、その人の事がわかったら、なんだか飽きてしまうときってない? その人をもっと知りたいのなら一緒にいるけど、なんかこの人といっても新たな世界が見えそうにないとわかってしまった瞬間、つまり一緒にいて自分の成長が見込めないと思ったら離れたくなるのではないかな。そんな感じなのではないか、その現象。よくわからんけど」(原文ママ)といった内容の投稿である。

本研究の目的・リサーチクエスト

以上のように、蛙化現象のような日常的な現象は経験的な理解によって構成されている可能性がある。すなわち、学術的に定義される蛙化現象概念とは異なった理解がなされ、「しろうと理論」(Furnham, 1988)が適用されていると考えられる。予備調査では、大学生を対象に蛙化現象がどのように理解されているかについて、テキストマイニングの研究手法を用いて明らかにする(探索

的検討)。続く本調査では、大学生を対象に蛙化現象がどのように理解されているかの質的な変化について明らかにするために、先行研究にみられる蛙化現象の主要な生起要因（虚像崩壊説および性交嫌悪説）と個人要因との関連を検討し、蛙化現象概念の理解における質的な変化を考察する。

虚像崩壊説とは、理想的に見えていた虚像としての相手が、告白してくることでただの男性に成り下がり、魅力が失われ失望する、という説明のことであり、性交嫌悪説とは、両想いになることで性行為が現実味を帯びるため、防衛機制として嫌悪感が発動する、という説明のことである（藤澤，2004）。もし虚像崩壊説が支持されるのであれば、恋愛に対して幻想を抱いたり、いわゆる「高い理想」をもっていたりする個人において蛙化現象が経験されやすいと考えられる。すなわち、蛙化現象の経験と「恋愛意識の高さ」との間に正の相関関係がみられることが予測される。また、もし性交嫌悪説が支持されるのであれば、異性愛に対する不安や回避傾向が強い個人において蛙化現象が経験されやすいと考えられる。すなわち、蛙化現象の経験と「異性不安」および「愛着スタイル」との間に正の相関関係がみられることが予測される。

Ⅱ 方法

予備調査

2023年4月、北陸地方の大学生98名がオンラインの質問紙調査に参加した（男性25名、女性72名、その他1名、平均年齢19.29歳、 $SD = 1.23$ 歳）。調査参加者のうち、「蛙化現象」を知っていると回答した86名（87.76%）を分析対象とした。

質問紙構成 （1）蛙化現象に関する質問、（2）異性不安（富重，2000）、（3）成人の愛着スタイル（中尾・加藤，2004より抜粋；18項目）、（4）自尊心（山本他，1982より抜粋；9項目）、（5）デモグラフィック（年齢、性別、学年、異性の友人数）について尋ねた。

質問紙調査の結果、蛙化現象の経験者は11名（12.8%）であった。相関分析の結果、蛙化現象の経験と愛着スタイル、異性不安、自尊心との間に有意な相関関係はみられなかった。「蛙化現象とはどのような現象だと思うか」（自由記述）の

回答における頻出語をTable 1に示す。このうち、出現数が多かった「好き」および「好意」と共起する名詞および動詞を検討した（Figure 1：「好き」および「好意」との共起ネットワーク）。その結果、「人」、「自分」、「相手」、「気持ち」、「持つ」、「感じる」、「向ける」等の語が抽出された。典型的な記述は、「好きな人に好意を寄せられると気持ち悪く思ってしまう」、「好きな人が自分に好意を持っているとわかると相手のことが生理的に無理になること」、「自分が好意を持っている相手が自分に好意を向けたとき、気持ち悪いなど嫌悪の感情を持ち始めること」等であった。一方、嫌悪感とは異なる記述（「冷める」、「好きではなくなる」等）や嫌悪感を知覚するタイミング（「急」、「瞬間」等）の記述もみられた。

Table 1. 自由記述における頻出語

出現語	出現数	出現率
好き	63	73.26%
好意	48	55.81%
自分	44	51.16%
人	41	47.67%
相手	39	45.35%
冷める	38	44.19%
現象	33	38.37%
気持ち	23	26.74%
悪い	19	22.09%
持つ	14	16.28%
感じる	13	15.12%
向ける、行動	各11	12.79%
急	9	10.47%
寄せる	8	9.30%
思い、瞬間、振り向く	各7	8.14%

Note. 感情に関連する語のみ抜粋

予備調査の結果について、全体として蛙化現象についての記述は形式的には学術的な定義と概ね類似していたが、内容的には学術的な定義と異なって理解されていたことが明らかとなった。実際、「冷める」、「好きではなくなる」等の嫌悪感とは異なる記述や、「急」、「瞬間」等の嫌悪感を覚えるタイミングについての記述がみられ、部分的に学術的な定義とは異なる理解がされていることが明らかになった。蛙化現象に含まれるいわゆる「恋愛心理」は、突発的に起こった不快感を伴う現象として、友人同士の日常的な会話のテーマになりやすいと考えられる。実際、面白おかしく会話に取り上げられることから、タイミングに関

する表現がみられたり、嫌悪感という明確な表現を避けたりするなど、蛙化現象はより日常的な概念として浸透しているだろう。すなわち蛙化現象という学術的な概念はしろうと理論(Furnham, 1998)化しているといえる。

なお、予備調査では学術的な蛙化現象の定義に該当する体験をした参加者は11名と少数であったため、今後は十分にサンプル数を確保する必要がある。また、しろうと理論としての蛙化現象がどのような個人要因によって説明されるかという生起要因や時代的な質的变化については検討できなかった。

本調査

2023年6-7月、北陸地方の大学生62名がオンラインの質問紙調査に参加した(男性12名、女性50名、平均19.93歳、 $SD = 1.18$ 歳)。調査参加者のうち、「蛙化現象」を知っていると回答した58名(93.55%)を分析対象とした。

質問紙構成 (1) 現在・過去の恋愛に関する質問、(2) 蛙化現象に関する質問、(3) 恋愛に対する態度(和田, 1994より一部抜粋)(4) 異性不安(富重, 2000)、(5) 成人の愛着スタイル(中尾・加藤, 2004より一部抜粋)、(6) 自尊心(山本他, 1982より一部抜粋)、(7) デモグラフィッ

ク(年齢、性別、学年、異性の友人数)について尋ねた。具体的な質問項目および内容は次の通りである。

- (1) 調査協力者の恋愛状況と経験を調べるため、和田(1994)を参考に、現在の恋愛状況(恋をしていない、片思いの人がいる、恋人がいる)、交際期間(月単位、恋人がいると回答した人のみ)、過去の恋愛経験(片思いのままで終わった人、交際した人)を尋ねた。また、恋愛に対する態度から当てはまるものに回答を求め、さらに、恋愛対象の人柄についても自由記述で回答を求めた。
- (2) 蛙化現象に関する質問では、「蛙化現象を知っているか」、「蛙化現象とはどのような現象だと思うか」(自由記述)、「蛙化現象を経験したことがあるか」について尋ねた。続いて、蛙化現象を過去に経験したことがある参加者に、「蛙化現象が生じた中で最も印象に残っている出来事」を思い浮かべてもらい、「その当時の状況とその時の気持ち」について自由記述で回答を求めた。
- (3) 蛙化現象の経験の有無との関連を調べるため、恋愛に対する態度尺度(和田, 1994)から、「恋愛は男と女の間のもっとも高い目標である」、「恋愛関係をうまくもてない

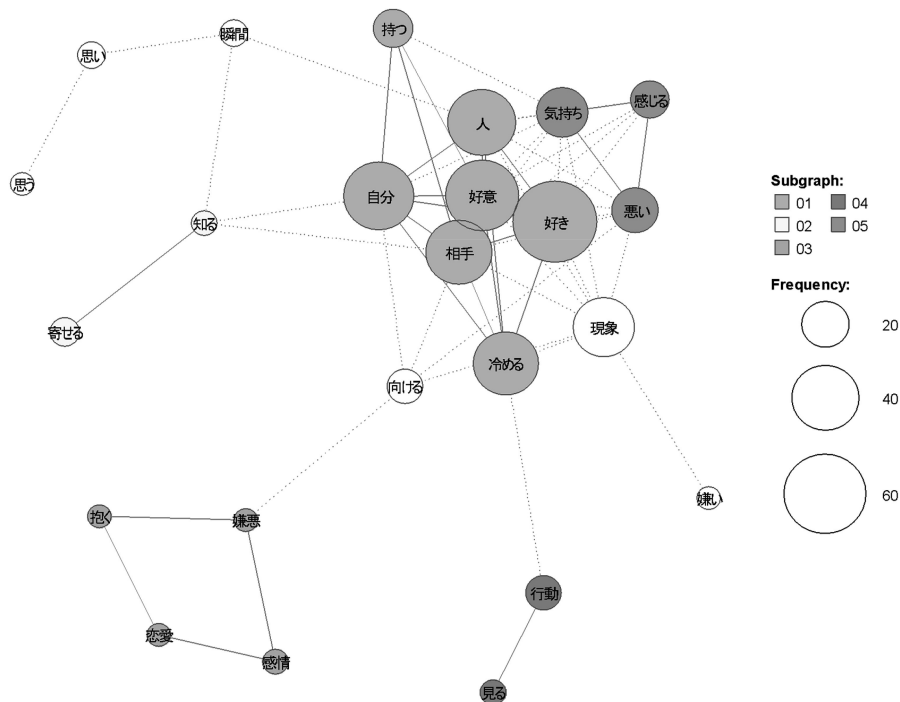


Figure 1. 「好き」および「好意」との共起ネットワーク

人は、人生において本当の幸せや成功はない」など高い負荷がみられた11項目（恋愛至上主義）および、「恋愛感情をもっているという確信がないのなら、人は結婚すべきではない」、「真の恋愛状態というのは、永遠の恋愛である」など高い負荷がみられた7項目（理想の恋愛）の尺度を使用した。各内容につき5段階（「1：そう思わない」から「5：そう思う」）で評定した。

(4) 富重 (2000) が, Leary (1983) の相互作用不安尺度および, Cheek and Buss (1981) のシャイネス・スケールの項目（特に異性間相互作用について言及している項目）を参考に項目を作成した尺度を使用した。各内容につき, 自分がどの程度当てはまるかを6段階（「1：全く当てはまらない」から「6：非常によく当てはまる」）で評定した。

(5) Brennan et al. (1998) の Experiences in Close Relationships inventory, 以下 ECR と略す) を中尾・加藤 (2004) が日本語版作成した成人愛着スタイル尺度 (ECR) を使用した。親密性回避因子17項目および見捨てられ不安因子9項目の中から因子負荷量の高い9項目を用いた (親密性回避9項目, 見捨てられ不安9項目)。

(6) Rosenberg (1965) の Self Esteem Scale を翻

訳した10項目の自尊感情尺度 (山本他, 1982) から, 本邦での妥当性の低さが指摘されている1項目を除く9項目を使用し, 4段階（「0：あてはまらない」から「3：あてはまる」）で評定した。

(7) 年齢 (歳), 性別 (男性, 女性, その他), 学年 (年), 「個人的なことを相談できる人の人数」「家族・恋人・企業アカウントを除いたLINE友達 (異性) の人数」について尋ねた。

Ⅲ 結果

蛙化現象の経験者は15名 (25.9%) であった。記述統計量を Table 2 に, 相関分析の結果を Table 3 に示す。相関分析の結果, 蛙化現象の経験と恋

Table 2. 記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min.</i>	<i>Max.</i>
1. 年齢	19.94	1.19	18.00	23.00
2. 異性の友人数	23.69	72.88	0.00	560.00
3. 片思い人数	1.82	1.49	0.00	5.00
4. 交際人数	1.74	2.05	0.00	10.00
5. 交際期間 (月)	15.07	13.13	1.00	58.00
6. 蛙化現象の知識	0.98	0.34	0.00	3.00
7. 蛙化現象の経験	0.27	0.55	0.00	3.00
8. 蛙化現象の経験時期	13.12	5.35	6.00	21.00
9. 理想の恋愛	2.71	0.69	1.57	4.57
10. 恋愛至上主義	2.23	0.77	1.00	4.36
11. 異性不安	3.70	1.08	1.00	5.89
12. 親密性回避	3.23	1.05	1.11	6.00
13. 見捨てられ不安	3.44	1.39	1.11	6.78
14. 自尊心	1.41	0.72	0.00	3.00

Table 3. 相関分析の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1. 年齢																
2. 性別 (0: 男性, 1: 女性)	-.166															
3. 学年	.895 **	-.130														
4. 異性の友人数	.009	-.232 +	.065													
5. 恋人の有無	-.037	-.111	-.077	-.017												
6. 片思い人数	-.083	.135	-.122	.207	.163											
7. 交際人数	-.135	.259 *	-.106	.014	.378 **	.105										
8. 交際期間	.104	-.639 **	.158	.102	.000	.155	-.313									
9. 蛙化現象の知識	.120	.220 +	.026	-.372 **	-.033	-.138	-.006	-.730 **								
10. 蛙化現象の経験	.179	.172	.093	-.083	-.182	-.084	.049	-.140	.554 **							
11. 蛙化現象の経験時期	-.086	-.067	-.079	.009	.028	.113	-.081	.020	.100	.127						
12. 理想の恋愛	-.281 *	-.097	-.312 *	.066	.247 +	.041	.143	.014	-.201	-.362 **	.087					
13. 恋愛至上主義	-.259 *	-.170	-.214 +	.351 **	.358 **	.196	.354 **	.149	-.220 +	-.211 +	-.033	.552 **				
14. 異性不安	.298 *	-.056	.309 *	-.052	-.187	.073	-.228 +	.172	-.013	-.163	-.241 +	-.017	.061			
15. 親密性回避	.283 *	-.066	.347 **	.035	-.239 +	-.039	-.326 **	.035	-.030	.047	.071	-.202	-.210	.290 *		
16. 見捨てられ不安	-.061	-.158	-.113	-.015	.135	.115	.012	-.005	.155	-.115	-.128	.219 +	.420 **	.396 **	.157	
17. 自尊心	-.155	-.090	-.124	.150	.240 +	-.035	.195	.104	-.077	.049	.314 *	.072	-.074	-.448 **	-.182	-.370 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 4. 自由記述における頻出語

出現語	出現数	出現率
好意	36	62.07%
好き	32	55.17%
冷める	24	41.38%
気持ち	22	37.93%
悪い	16	27.59%
思う	14	24.14%
向ける	13	22.41%
感じる	11	18.97%
持つ	10	17.24%
寄せる	9	15.52%
抱く	7	12.07%
嫌悪	6	10.34%

Note. 感情に関連する語のみ抜粋

愛に対する態度の「恋愛至上主義」($r = -.362, p < .01$) および「理想の恋愛」($r = -.211, p < .10$) との間に負の相関関係がみられた。また、蛙化現象の経験と「異性不安」および「成人の愛着スタイル」との間には有意な相関関係はみられなかった。

「蛙化現象とはどのような現象だと思うか」(自由記述)の回答における頻出語(感情関連語上位)をTable 4に示す(Figure 2:「好き」および「好意」との共起ネットワーク)。予備調査と同様に、全体としては形式的には学術的な定義と類似した

理解がなされていたものの、「冷める」という記述が頻出し、部分的に学術的な定義とは異なる理解がされているという結果が再現された。

IV 考察

結果より、全体としては形式的には学術的な定義と類似した理解がされていた。一方、「冷める」という記述が頻出していたことから、予備調査の結果が再現されたといえる。また、蛙化現象の経験と恋愛に対する態度の「恋愛至上主義」($r = -.362, p < .01$) および「理想の恋愛」($r = -.211, p < .10$) との間に負の相関関係がみられたことから、蛙化現象の虚像崩壊説については、恋愛に強い理想を抱いているからといって、蛙化現象が生じるわけではない可能性が示唆された。むしろ、現実的に恋愛を捉えている人に蛙化現象が生じている可能性が考えられる。すなわち、時代的な背景として恋愛に対する考え方が変化している可能性が想定できる。一方、蛙化現象の経験と異性不安および成人の愛着スタイルの間には有意な相関関係はみられず、性交嫌悪説については検討の余地が残された。

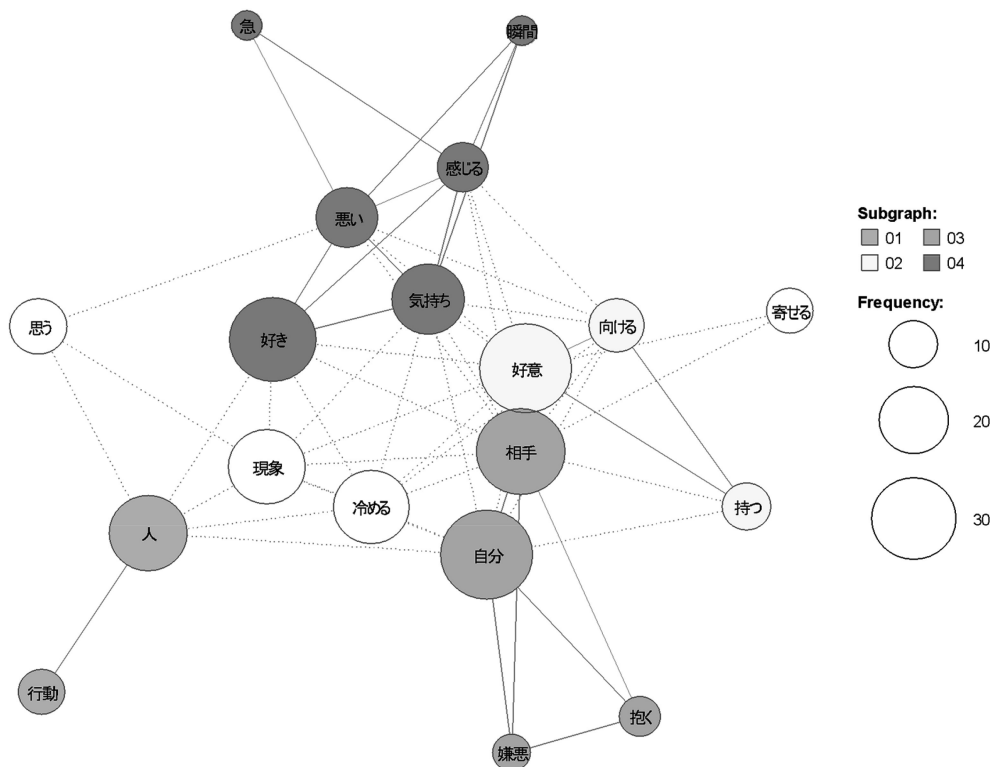


Figure 2. 「好き」および「好意」との共起ネットワーク

しろうと理論としての蛙化現象

吉田他（2020）は、「蛙化現象は特有の困難さを引き起こす確かに存在する心的現象である」ことを実証している。しかし予備調査および本調査の結果を考慮すると、実際のところ現代の若者が理解している蛙化現象と、学術的な概念の間には乖離がみられる。現代大学生にとって、蛙化現象は本来学術的に定義されているような複雑な心的状態から起きる現象としてではなく、日常的でカジュアルな心理現象として捉えられている可能性がある。社会の変化に伴う個人の恋愛観の変化（自由恋愛への移行）を踏まえると、恋愛に重きを置かない若者が増加している可能性も考えられる。ただし、本研究ではこのような価値観の質的な変化については十分に検討できていない。いわゆる「お一人様」思考が気楽であるという考え方が反映されているのか、それとも恋人や配偶者、パートナーを自分の人生の重荷に感じてしまうから生じるのか、今後の検討が待たれる。恋愛観に関連する別の要因としては、川久保・小口（2022）における「興味喪失（恋愛の意義のわからなさ）」および「現状希求（恋愛に対する自信のなさ）」の影響も想定できるかもしれない。

先行研究でも、現代の恋愛の在り方が変化していることが述べられ、特に1980年と1992-1994年の雑誌記事で描かれる恋愛模様を比較した研究（谷本，1998）では、1980年の恋愛物語においては結末部分（結婚や失恋）が誌面の多くを占めているのに対して、1992-1994年では、中間部分（魅力・アプローチなど）つまりプロセスが膨張していることが明らかになっている。谷本（1998）は、現代の恋愛物語の目的はプロセスからなるべく多くの楽しさを抽出することであると考え、例えば曖昧な関係を楽しむことや、友達以上恋人未満が心地よいという言説が多いことを指摘している。これは、蛙化現象における「現在の関係への満足感」および「今の関係を壊したくない（という気持ち）」（川久保・小口，2022）を反映しているものであると考えられる。また、谷本（1998）は好意をあからさまに伝えるアプローチよりも、それに付随する演出が重要な要素として現れてきておりとし、プレゼントの渡し方一つでも、ただ物を渡すよりも初めに安価な物を渡して落胆させた後

に高価なきちんとした物を渡す演出が推奨されていると述べている。この演出を重要視する傾向は、現代における蛙化現象が生じる代表的な場面である「フードコート（において席を探す姿）」、「お会計（に手間取る様子・スマートさに欠ける様子）」などに顕著に現れているだろう。

その他の解釈可能性について、蛙化現象は一般的な好意（慕わしい気持ち）として知覚されるだけではなく、「尊敬」（その人を優れていると思い、敬う気持ち）や「憧れ」（自分もそうなりたいと思う気持ち）と混同して知覚される可能性がある。自身にとって、一般的に知られている「好意」を抱いていたとしても、実はその好意は「尊敬」や「憧れ」であるかもしれない。その場合、相手から一般的な好意として返された時に、自分の抱いていた気持ちとは違う気持ちを向けられたことで、相手と気持ちのミスマッチが起こったため生理的な嫌悪感として反応するのではないかと考えられる。尊敬や憧れを含めた好意の対象は、年下、年上、同い年、無関係な人と多方面に向けられる気持ちであるため、好意の概念範囲として蛙化現象の元の定義で想定しているよりも広範囲に適用されている可能性がある。

限界と展望

最後に、本研究の限界について述べる。第1に、本調査の結果から、性交嫌悪説については検討の余地が残る。蛙化現象の経験と異性不安および愛着スタイルとの間だけでなく、異性との交際経験との間にも有意な相関関係はみられなかったことから、性交に対する嫌悪は蛙化現象の経験と無関連である可能性が考えられる。

第2に、蛙化現象の学術的な概念が登場した2004年から2020年代までの質的な変化の検討について言説分析を行う必要があるだろう。言説分析によって時代背景も踏まえた質的な変化を記述できる。さらに、学術定義通りでなくても蛙化現象の経験数が少ないことから、本研究でその実態を正確に捉えられているか、すなわち一般化可能性については再検討が必要だろう。

第3に、本研究で扱う蛙化現象は異性愛において生じる現象であると限定していた。実際、同性愛者の蛙化現象の経験的な語りはほとんど観察さ

れない。しかし、広く恋愛における現象であると考えると、現時点でサンプル数は少ないものの同性愛者においても同様の現象が生じている可能性がある。

以上を踏まえて、今後は交際経験の有無を測定した上で年代間比較を行うことで、思春期から青年期にかけて蛙化現象が特に生じやすいことや、その理解が年代や好意の対象によって異なる可能性についても検討する必要がある。

〈引用文献〉

- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46–76). New York, NY: Guilford Press.
- Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1981). Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41(2), 330.
- 藤澤 伸介 (2004). 女子が恋愛過程で遭遇する蛙化現象 日本心理学会大会発表論文集, 第68回, pp. 1095.
- Furnham, A. (1988). Lay theories: *Everyday understanding of problems in the social sciences*. New York: Pergamon Press.
- 川久保 惇・小口 孝司 (2022). 両想いになるとなぜ冷めてしまうのか? 日本心理学会大会発表論文集, 第86回, pp. 156.
- Leary, M. R. (1983). Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, 47(1), 66–75.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 第75巻, 第2号, pp. 154–159.
- Rosenberg, M., 1965. *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press, Princeton, NJ.
- 谷本 奈穂 (1998). 現代的恋愛の諸相 社会学評論, 第49巻, 第2号, pp. 286–301.
- 富重 健一 (2000). 青年期における異性不安と異性対人行動の関連—異性に対する親和指向に関する他社比較・経時的比較の役割を中心に— 社会心理学研究, 第15巻, 第3号, pp. 189–199.
- 和田 実 (1994). 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 第34巻, 第2号, pp. 153–163.
- 山本 真理子・松井 豊 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 第30巻, 第1号, pp. 64–68.
- 吉田 光成・下斗米 淳・山田 茉奈 (2020). 向けられた好意を拒絶することは苦しいことなのか? (1) 日本教育心理学会総会発表論文集, 第62回大会, pp. 256.
- 吉田 光成・下斗米 淳・山田 茉奈 (2021). 向けられた好意を拒絶することは苦しいことなのか? (2) 日本教育心理学会総会発表論文集, 第63回大会, pp. 331.
- 吉田 光成・山田 茉奈・下斗米 淳 (2022). 向けられた好意を拒絶することは苦しいことなのか? (3) 日本教育心理学会総会発表論文集, 第64回大会, pp. 275.